会報 松陰

No. 15
平成 4. 10. 1

・松陰敬仰の気運醸成
・松陰精神の継承普及
・松陰教学の研究振興

○編集発行　財団法人松風会
〒753　山口市大手町2－18
山口県教育会館内 TEL 0839(22)1218

時代の先覚 吉田松陰

財団法人松風会
理事長　松永祥甫

「平素趨庭、訓誨に違ふ、斯の行独り識る厳君を慰むるを。耳には存す文政十年の詔、口には熟す秋洲一首の文。小少より尊攘の志早く決す、蒼皇たる輿馬、情安んぞ紛せんや。温清剰し得て兄弟に留め、直ちに東天に向って怪雲を掃はん。」

この詩は『家大人(父)に奉別す』の題名で吉田松陰先生が、安政六年五月二十三日、即ち幕府の命で江戸への出発の前々日野山獄での作であります。その大意は「平素より父の教訓を受けているが、それを守ることができない。この度関東に行くことこそ平素の父の教訓通り勤皇事業のためである。定めし父の御心を慰むることになろうと思われる。思えば父から若きときしばしば教わった文政十年の詔は今も耳に残っている。又父の云われた京都賀茂神社神官が書かれた神国由来をお聞きしての、年の頃から尊王攘夷の大精神は決まっていた。今自分は慌ただしく輿に乗せられて江戸に送られるが、そんなことは自分の感情を紛乱することはできない。兄上は父母に例えば冬は温かく夏は涼しくなるように家に留って孝行を願う。私は直ちに関東に向って尊攘を蔽い隠す妖しき雲を払い除く決意である」とでも申せましょう。「文政十年の詔」とは「仁光天皇が十一代将軍家斉を太政大臣に兼任した時の詔書で、征夷大将軍が文官を兼任する慣習は従来もあったが、太政大臣は空前のことであったにもかかわらず、将軍父子は坐らにしてこれを受け唯世臣を上落させてお礼言上したのみである。父はこれを聞いて、沐浴衣を更め遥かに皇居を拝し且つ泣いて「皇室の式微、武臣の跋扈終に此に至れるか」と嘆き、その詔書を松陰兄弟のため謹書して、これを暗誦させた」ことを指しております。

松陰と門下生

又「第一に先祖を尊び、第二に神明を崇め、第三に親族睦まじく、第四に学問を好む」という立派な家風の中で育てられ成長しております。

元来長州藩の教育は亨保四年(一七一九)に設立された藩校明倫館にその源流を求めることができます。その学風は総じて儒学でありますが、個々人が道徳的修養を積みさえすれば、天下の安泰は自ら実現できると説いた朱子学を厳しく批判し、社会全体の安泰を基準として道徳を考えようとする政治的色彩の濃い荻生徂徠(一六六六～一七二八)の主唱した古文辞学であります。

実父百合之助(一八〇四～一八六五)から幼時に受けた四書五経の素読、次いで天保六年(一八三五)叔父吉田大助(一八〇七～一八三五)の後を継いでからは、山鹿流兵学師範としての専門的教養が松陰に求められております。叔父玉木文之進は松陰の英才を見抜いて、愛敬期待すること甚だ重く、その教育には心血を注ぎ「苟も報国の志あらば慎んで凡士となる勿れ」と戒めていたと云われています。村田清風、林真人、山田宇右衛門、山田亦介などにより基礎教育及び兵学修業に専念、その間に大義を明かにし、世界の大勢をも知らされております。

廿歳、既に外圧を実感する時代に突入しますが、九州・江戸・東北遊学、実地踏査、佐久間象山始め先賢知友を得、更に驚く可き数多くの書籍を読破し、到達した信念は国家危急存亡の秋、死生を超越して、救国の志を貫徹しようと決意します。至誠留魂、維新回天の事業は成就します。先生が維新の原動力吉田松陰と云われる所以であります。

吉田松陰と維新の青年群像

松風会理事　三輪稔夫

一

杉家墓所と松陰先生誕生地（以下松陰）との中間の丘に、下田踏海の挙決行直前の松陰と金子重輔（重之助）の勇姿像が、維新百年を記念して萩市によって建立された。萩市出身の彫刻家長嶺武四郎の制作に基づいたもので、その志士的、俊傑的実行を彷彿させて深い感動を覚える。

後姿左　平井山口県知事、右は松永　松陰群像建立推進委員会会長（松風会理事長）

同様に松下村塾の教育やその成果を象徴する。松陰を中心とした青年群像、とりわけ全国に向って旅立つ憂国至誠の姿の実現は、県教育会・松風会十年来の悲願であった。たまたま萩・明木有料道路が萩往還とほぼ並行に建設され、その中央部萩往還と接する箇所にサービスエリアを造り、その中核建造物として県当局の格別の配慮で松陰記念館と標記群像の設立となった。

二

踏海の挙に失敗した松陰は、「万死自ら分とす、一事隠す所なし、願はくは筆を提げて是れを記せよ」と、捕に着いた。更に幕吏に対しては、「国禁は百も承知の前なり、古人（趙王が漢の高祖に罵られたので、趙王の家臣貫高は高祖を殺そうとして、趙王と共に投獄）の所謂「事成れば王に帰し、事敗れば独り身坐するのみ」と申す心得にて、「事成れば上は皇朝の御為め、下は藩主の為めにもなるべく、もし事敗れば、私ども首を刎ねらるとも苦しからず、覚悟の上なり」と始終申立て候」と、『回顧録』に認めた。憂国の実行に死を賭けた志に迷いはなかった。生命を賭けるといってもよいが、それでは私心の入り込む余地がないでもない。

高杉晋作・吉田松陰・久坂玄瑞

後に松陰は『武教全書講録』の中で、「死を全道に守る」の語句を取り出して、「死を守るとは死を従らにせず、持ち詰めて居ることなり。……全道に於て一死を致し、平生の小忿を忍びて、忠孝の大節を立つることなり」と、堂々と述べ得るわけである。死を賭けた憂国の実行が至誠であり、忠孝である。

三

安政元年三月三日、日米和親条約（神奈川条約）締結調印、下田・箱館二港の開港は、彼我の国力差から一応認めないわけにはいかなかった松陰である。更にここ十年間は、西洋と兵を交えることはないと判断した松陰は、海外事情探索により我が国本を養うため下田踏海の挙に出たが失敗に終り、自由な行動は一切断たれてしまった。

品川弥二郎・山田顕義

やがて安政四年、松陰主宰の松下村塾は次第に整い、塾生の人間建設に全力を傾注する。別言すれば、門下生それぞれの心の中に松陰自身が生きさえすれば、七生に亘って国本を培う最強最大な後継者が輩出しないはずはない。『孟子・離婁上・第十二章』には「至誠にして動かざる者は未だこれあらざるなり。誠ならずして未だ能く動かす者はあらざるなり」とある。松陰はひそかにこれを期す。

ついては時務を知らなければならない。中国では太平天国の乱が起こり、続いてアロー号事件と聞く。安政四年三月十三日、久坂玄瑞が太平天国の乱に関する近稿を松陰に示した。松陰は思い立ったが吉日と、久坂の稿中の詩から『吉日録』の筆を執り始める。松陰は久坂の詩のあとに「余、未だ新聞紙を見ず。或は云はく、暎夷復た事を広東に起すと」書く。新聞紙は現代語である。新しい見聞を書きつけた紙を言ったものであろう。事を広東に起すとはアロー号事件と察せられる。『吉日録』には、小郡岩淵村孝婦阿石、船木代官（佐々木八郎兵衛）の櫨樹植え、徳地代官（山田宇右衛門）の櫨樹植え（人皆「山へも田へも櫨を宇右衛門」と云うよし）や茶紙等の民利、来原良蔵の嚶鳴社（明倫館出身少壮者で組織された文学同人社。周布政之助中心）に与えた乙卯（安政二年）江戸震災後の相模国御備場（戍営）の情況、丙辰（安政三年）七月、下田港亜墨利加応接日記より等…の情報が同年五月十九日まで記入してある。

安政五年三月の塾新聞『飛耳長目録』は第八号で、半紙五十八枚表裏に、朝廷、公卿、公家、京師、水戸、加賀、仙台、薩摩、越前各地の動向・風聞が集録されているという。してみると、第一号は『吉日録』中の要点を含めて、安政四年の五～六月ご

ろに村塾に備え付けられたと思われる。

四

安政三年七月アメリカ総領事ハリス、下田駐在。安政四年十月、ハリスは幕府に強要して江戸入り、その二十一日将軍家定に謁して国書提出。続いて老中堀田正睦を訪ね、英仏の武力介入を防ぐため米国と通商条約を結ぶことの賢明を説く。幕府は京都・列藩の反対をおそれ、安政四年十二月、国書訳文・ハリスとの会見始末書を諸藩に示して意見を求む。なお、将軍継嗣問題もまとって、国論統一の見込みなく、いわゆる狂瀾怒涛の幕開けとなる。

山県有朋・木戸孝允・伊藤博文

ハリス江戸入りを襲わんとして投獄された水戸三義士の情報が、安政四年九月江戸藩邸記録所背徒となって村塾を出た吉田栄太郎から年末に松陰のもとに届けられる。その前十一月には『蘭夷密報』の写しも送ってくれた。松陰の盟友桂小五郎も藩府へ栄太郎同様に送付している。

梅為百花魁　春香十分宣
人誰豪傑徒　能為天下先
此身幸未死　沿例迎新年

松陰は義弟久坂玄瑞と村塾に新年を迎え、おのおの韻を分けて三十首短古を作るが、その最初の一句である。暗に松陰自身、豪傑の徒として天下の魁にならなければならないと述べる。又「幽囚不可出」と最後の句では言っているが、松陰は心に深く決して『吉田氏略叙』の筆を執り始める。

こうして松陰は安政五年正月六日『狂夫の言』を書いて村塾に起ちあがった。「天下の大患は、其の大患たる所以を知らざるに在り。……当今天下の亡びんこと己に決す」とし、米国の狡猾な対日政策から将軍継嗣問題に及び将来必ず容喙する点、義を知らぬ民衆を慈善施設で懐柔する等から、階級を打破して言路を洞開する大改革を勤皇雄藩として確立することを要望した。

九日には藩直目付になった清水図書に、「飛耳長目は今日の急務」と訴える。十日は月性に、「六十四国は墨になり候とも二国にて守返し候様仕らでは日頃の慷慨も水の泡と存じ候。御議論の所委敷く洞生（松浦松洞）へ御示し待ち奉り候」とし、十一日の追啓を併せ、「中谷正亮が清水図書出足前（十日夜）に会い、清水は松陰の飛耳長目に乗気だが、藩の議論が気遣敷く候」との報告を受けて、これを書き送る。

問題は藩の議論である。松陰のように幕府や諸国に防長二国で立ち向うことは現実的に不可能である。村塾の書生論的な考え方に対し、藩府、特に周布政之助を中心とする嚶鳴社との対立である。松陰とは旧友で村塾を外から支えていた中村道太郎と土屋松如（粛海）は、要路を説得しようとして逆に説き伏せられ、周布側に傾く。その上来原良蔵も「墨夷に吾が国を開いて貰うことを愉快とするに似たり」と松陰は思う。こうなっては、「僕は孤立狗死に相違なく、夫れも恨みず候へども、吾れ死せば本藩は悉く淪胥（相共に滅ぶ）と覚え候。…何卒上人の御出府を希い候」と、正月十九日月性に対し和解調停を依頼する。月性は二月中旬来萩、法話の形で尊王攘夷論を数箇寺で説き、塾生全員も聴講する。この間、月性は松陰に会い、周布に松陰の希望も伝え両者の和解が成立する。十月ごろまでこの関係は持続され、最も重要な時期に藩の大綱が松陰の要望も入れられて決定されたことは、天下国家のための祝福であった。

天野清三郎・野村和作

この時勢の動向を支えたものが飛耳長目である。二月久坂玄瑞は江戸へ、三月松浦無窮も江戸へ、三月中谷正亮は熊本・柳川に赴き六月末京都へ、七月入江杉蔵は江戸へ、七月高杉暢夫は江戸へ、七月福原清介（松陰の兵学門下）伊藤伝之助・杉山松介・伊藤利輔・岡仙吉・山県小助（帰国後村塾入り）等六名は京都・近畿へ、八月尾寺新之允は江戸へ。……すべて公命による。松陰は必ず送叙を贈る。それぞれの青年に、存在個性と学問の進捗をたたえ、呼応する魂と魂の結びつきから訪問先までも書き与える。すべての送叙を出す紙数はないのでただ一つ、入江杉蔵に与えた末文を示す。

「杉蔵往け。月白く風清し、飄然馬に上りて、三百程、十数日、酒も飲むべし、詩も賦すべし。今日の事誠に急なり。然れども天下は大物なり、一朝奮激の能く動かす所に非ず、其れ唯だ積誠之れを動かし、然る後動くあるのみ。」

しかもこの文の前に杉蔵をたたえ、「其の憂の切なる、策の要なる、吾れの及ぶ能はざるもの」と伝えている。

憂国の至誠・大和魂は松陰刑死後再び燃え上がる。

＜付　記＞　（文責事務局）

松陰記念館及び松陰群像は次の委員会により推進された。

一松陰記念館整備検討委員会
会　長　田立栄治
（山口県企画部次長）

●歴史考証部会（委員 六名）
部会長　三輪稔夫（松風会理事）

●記念館整備検討部会（委員十二名）
部会長　古元允之
（山口県道路整備課主幹）

二松陰群像建立推進委員会
会　長　松永祥甫（松風会理事長）
（委員、幹事 十四名）

教えることのできない教えたいことがある

―私が松陰先生から学んだこと―

松陰研修塾　和田征文
（吉敷郡阿知須町立阿知須中学校）

苦渋と蹉跌の繰り返される日々にあって、ふと手にした書物の一行がその折々の自分を勇気づけてくれたと思うことがある。

時としてそれが、石川啄木の歌集であったり、斎藤喜博や灰谷健次郎、落合信彦、河合隼雄の文章であったりする。

そして、そうした心の遍歴の中で比較的多く接したのが吉田松陰に関する書物であり、松陰の辞（言葉）であった。

それで、体系だった学習をしてきた成果を述べるというよりも、私の精神史を松陰に照らして回顧する形で綴ってみたい。

一　松陰先生への原点として

萩城下を眺望することのできる誕生地は、私が好んで訪れる思い出深い地である。

幼い日、父はよく私をここに連れ出した。「帰らじと思ひさだめし旅なればひとしおぬるる涙松かな」「親思ふこころにまさる親ごころけふの音づれ何ときくらん」等の歌と共に松陰の人生を父は語ってくれた。

戦時中、青雲の志を抱き満州に渡った父は、終戦後、母と幼い私とを伴って引き揚げてきた。終戦の混乱の中で帰国した父に過酷な第二の人生が待っていた。人を頼って、慣れない職人として再出発した父が、絶えず私に語ってくれていたのは「貧しさや苦しさの中にあっても、自分を見捨ててはいけない。」ということではなかったかと、父の七回忌を終えた日々の中で思う。

松下村塾でのきれぎれの話も、父の結論は常にこのことに向かっていた。父は、松陰の言行と自己の人生とを重ねながら語っていたのに違いない。ここに、私の松陰像の原点がある。

中学三年生の時に、当時萩第一中学校長であった田中俊資先生が著された「新日本の光吉田松陰」を手にした。これによって松陰の一生が概観でき、「自非読萬巻書、寧得為千秋人」という聯も読むことができた。文中の宮部鼎蔵との友情や金子重輔との下田踏海の挙は少なからず感動した記憶がある。

中・高生の時だけでなく、大学生の時にも何か考え悩むところがあれば、よく誕生の地に立ち、山道を分け入って背後にある田床山に登った。

二　新米教師挫折の中で

学生時代に山口の古本屋で偶然に入手した河野通毅著「吉田松陰の詩と文」により、「至誠而不動者未之有也」という孟子の言葉に漢文で出会った。爾来この文言が私の座右の銘となっている。相手に自分の思いが伝わらない時、それは自分の考えが不十分であるからだ。私はこの一行をそうとらえてきた。人に何事かを伝えようとして伝わらない時、とかく小人の私はその相手を恨んだりなじったりする心が動く。そうした場合、「至誠而不動者未之有也」と自己を戒め、慰めることにしている。

新採三年目に三年生の担任となった。友情、部活、勉強、進路等々について悩む生徒を目前にして、対岸の幸せを説き、濁流の中を泳ぎ抜けと叱咤しながら、岸辺で腕組みをしている自分自身に気付き、私は教師としての非力を悟った。そして、私自身の人間としての力量を疑い、自信のない日々を送った。

「どんなことがあっても自分を見捨ててはいけない。」という父の言葉も救いにはなり難い挫折感を味わっていた。そんな時に出会った本が、池田諭著「松下村塾近代日本を創った教育」であった。私は、この本に語られている松陰の教育への構えや実践に目を醒まされる思いがした。八方ふさがりの中で一条の光明を見い出し、改めて教師としての自己を立て直す機を得た。

○充実した人生、意味のある人生のあることを知らせて、実際に戦いとらせた。

○自分自身に教えていった教師に過ぎなかった。

○教育とは目覚める契機を与えること。

○自らの思想に責任を持ち、それを実践していく人間になることを求めた教育。

○禁止教育でなく、積極的に行動させる教育

これらの一節は現実味を帯びて私を鼓舞した。「学習の主体者はあくまでも生徒である。」という教師としての信条に確信を抱くようになり、私の苦悩の根源もこのこととかかわりが深いことに思い至らされた。要は、実践の場にどう具現化していくかであった。

三　迷えば戻るところとして

教師である前に人間でありたい。そんなことを当時の日記や拙い詩文の中に繰り返し書いている。そして、その具体像を松陰の中に求めた。この頃から原文で松陰の辞に触れたいと考えるようになった。二十代後半から三十代半ばにかけてである。そんな折に出会った本が、奈良本辰也著「日本の思想19吉田松陰集」であった。

この本は、上段が原文下段が現代語訳となっており、原文に

研修風景（萩青年の家）

初めて接していく私には願ってもない本であった。

○初めて生を幸（ねがひ）とするの念勃々たり。

○十歳にして死する者は十歳中自ずから四時あり。

○寧ろ玉となりて砕くるとも、瓦となりて全かるなかれ。

○愚かなる吾れをも友とめづ人はわがとも友とめでよ人々

当時、「留魂録」の中の言葉に多く魅せられたようで、線を引いたり、自分の思いを書き込んだりしていたところは、右のような箇所であった。中でも、「十歳にして死する者は十歳中自ずから四時あり。」の文言は、私の心をとらえた。様々な状況に遭遇して揺れる多感な中学生を、よくこの言葉で励ました。

研修風景（発表中の筆者）
（「新日本の光吉田松陰」をいただいて……）

春と秋と快い季は、厳しい冬と夏の間にある。厳しさを超えてこそ快い季を迎える喜びがある。人生の中で、日々の生活の中で四季がある。そして、実りの秋、花開く春は、やがて来る冬や夏を耐える準備をする時でもある……と。私自身に言いきかせながら、生徒に語ったように思う。

三十代半ば。自分なりの理論や実践を、果ては教育観や人生観を確立できたらと念じていた時代にあって「僕は忠義をする積り、諸友は功業をなす積り。」の獄中からの書簡の一節は、私の実践に向かう指針となった。この忠義を私の場合は「自己に忠実に」と読んだ。

「中学二年と言えば、昔なら丁度分岐点に立つ大切な時期。お前の一挙手一投足に目をつけている。唯、良い先生であったと後で言われるより、悔いのない様一日一日を送ってほしい。」――これは、教師になった年に父から送られてきた手紙の一節である。「自己に忠実に」は、この父の言葉にも共通した精神であった。迷えば戻るところとして、松陰の辞は少しずつ私の中に位置づいていく。

四　教育への思いから

三十代後半から四十代。私は近藤啓吾訳の「講孟劄記」を手にした。牢にある人に向かって「吾と諸君と其の境は逆なり。以て励みて得ること有る可きなり。」というくだりは、学問に向かう本物の構えについて指摘された思いで読んだ。今こそ自分自身を高めるという本当の学問ができるのだと、語りかけている松陰の熱情が伝わってくる。

当時、道徳教育のあり方について研究、実践を始めていた私にとって「『反求』の二字、聖経賢伝、百歳万言の帰着する所なり。」「『在身』の二字も同じ工夫なり。」という認識の仕方は、道徳教育の根本を私なりにとらえるための多大な示唆となった。

「松陰は教えたのではない。松陰の生へのベクトルに触れた若い魂が自ら学び取っていったのだ。」――こういう仮説をもって現在私は松陰研修塾の研修に取り組んでいる。

教えることのできない教えたいこととは、学問（学び）に向かう発心である。松陰の辞で言えば「志」となる。それも、知に支えられた志であり、気を内包した志である。様々に時代が変貌しようとする中で、学校教育の場が担っている教育の機能は、学習の主体者である子どもたちの「習」（鳥は自らが羽を動かして初めて飛ぶことができる）への構えを誘発し育くむことにあろう。

私はそのためには、教師自体の役割が伝達者から援助者に変わらなければならないと考えている。学習の主体者である子ども自体に対象となる教材（幅広くとらえたい）に対峙していく力（学ぶ力・志）を培っていく状況や場面を設定することが、援助者としての教師（大人）の任務であろう。言わば「時務」を背景においた「風」の醸成が教師の援助活動の中核になると考えているのだ。

現在、研修塾で「吉田松陰入門」を中心テキストとした講義を受けながら、私は私の教育への思いや願いを単純化していこうと、松陰の辞を「私の視座」で拾っている。単純化は原理原則解明への希求の中で生まれてくる。世の動きや状況が複雑になり混迷すればするほど単純化への志向が重要な意味をもつように思う。

その点、松陰の著述に触れ、辞に出会うことは、単純化への模索を大いに助けてくれる。なぜならば、松陰は我が身我が命を賭して本質的な「聖」に生きた存在であったからだ。

松陰の福堂策の中に、「獄中駸々乎として化に向かふの勢あるを覚ゆ。是れに因りて知る、福堂も亦難からざることを。」とある。現在とこれからの教育を考える際の要諦は、この一節にこもっている。

「化に向かふの勢」を感じ得る援助者がいて学ぶ者の「志」が育っていく。そして、獄中と言えども福堂となるという信念があって初めて「志」が育くまれていくのだと思う。要は、学習者の内面に「化」を覚え得る援助者の教育的感覚の有無の問題に尽きる気がする。

＊　＊　＊

こうしてみてくると、私の教育への現在に至る思いの原点はやはり、松陰の人間性信頼の教育にあったという気がする。

「古人の跡を求めず。古人の求めたるところを求めよ。」――芭蕉が門人に遺した言葉である。研究や実践への構えはこうでないといけないと自戒している。

我流の読みへの先達の御叱正を心から願ってやまない。

平成三年六月発足「松陰研修塾」の歩み

一　主　題　吉田松陰の甦る道を求めて―松陰像の追究―

※　この研修塾は三カ年を単位として実施する

二　研修塾の歩み

第一年次（平成三年度）

○六月、八月、十一月と三回延二泊五日の研修を実施

主な内容は、

研修風景（講義）

・松陰の全生涯の概観

・生誕から下田踏海にいたる松陰像の追究及び巡検

巡検はサイクリングで（萩市内）

・資料提供及び研究協議

・「赤間関街道ほか」

第二年次（平成四年度）

①六月十三日～十四日

於松陰記念館・萩青年の家

主な内容は、

・吉田松陰と維新の群像

・野山獄と松陰

・幽囚録及び獄舎問答

・資料提供「四境の役」

・講孟餘話　・研究協議

・丙辰幽室　・研究協議

②八月二十五日～二十七日

於　萩青年の家、主な内容

・松下村塾「丁己」

・松下村塾「戊午」

講義（松下村塾「茂午」）

・研究協議及び資料提供

・「徳山松陰会と歩み」

・死を賭けた証し「東送」

講義（死を賭けた証し「東送」）

・同　「留魂録」

・松陰教学と現代教育

「私が松陰先生から学んだもの」・研究協議

・研究相談及び巡検

研究相談（青年の家にて）

③十一月二十八日～二十九日

於　山泉荘、主な内容は、

・研究グループの構成

・研究相談

・資料提供「松陰の誠観とその変遷」

・松陰の学習観

第三年次予告（平成五年度）

○五月・研究相談・協議及び八月　指導講話（二回）

○二月・第一回松陰研修塾の修了・発表・講話等

吉田松陰と維新の群像の建立について

吉田松陰生誕 160 周年記念事業の一環として、山口県と萩市は、萩有料道路サービスエリア内に、近代日本の礎を築いた「教育者松陰」を紹介する『松陰記念館』を建設しました。そこで、維新の息吹きを永く後世に伝えたいと祈念し、「吉田松陰と維新の群像」の建立を発意したところ、各方面より御賛同を賜り、このたび群像の完成をみることができました。ここに、御協力いただいた方々の御芳名を記し、感謝の意を表します。

平成４年３月　松陰群像建立推進委員会
山口県・萩市

協賛者

財団法人　松風会　萩商工会議所
財団法人　山口県教育会　萩市観光協会
山口県退職校長会　萩旅館協同組合
山口県小学校長会　有限会社　城山
山口県中学校長会　玉木病院
山口県公立学校退職教頭会　かなめ会　松陰神社
山口県立公立学校教頭会　一般県道明木萩線道路改良工事・萩有料道路建設工事安全対策協議会
山口県公立高等学校長ＯＢ会
山口県高等学校長協会　萩市建設業協会
山口県高等学校教頭会　株式会社第一勧業銀行
山口県公立高等学校ＰＴＡ連合会　中国電力株式会社
山口県松陰教学研究団体　有限会社アーバンデザイン
山口指月会　他、多数の有志の皆様

（転載）…（松陰群像建立協賛者銘版より）

松陰群像建立募金関係収支決算書（平成４年４月吉日）

収入 (千円)		支出	(千円)
募金	28, 280	群像建立経費	20, 242
		銘版碑建設経費	210
		群像除幕式経費	150
		事務費（募金・礼状）	2, 014
		群像維持管理費（基金）	5, 664
合計	28, 280	合計	28, 280

＜事務局通信＞

▲一部　200円（絵葉書）

◀一部　500円（送料別）

財団法人松風会 役職員

役職名	氏名	役職名	氏名
理事長	松永　祥甫	理事	河村　太市
理事	二木　秀夫	理事	東条　孝和
理事	山本　重治	理事	石原　啓司
理事	三輪　稔夫	監事	陶山　長
理事	大田　恭次	監事	藤沢　菊治
理事	谷口不二彦	事務局長	藤永　寿敏
理事	岩本　肇		